

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | <書評>Ray Watkinson "William Morris as designer"<br>Studio Vista, London, 1967 レイ・ワトキンソン著<br>羽生正気・清訳 「デザイナーとしてのウィリアム・モリス」 岩崎芸術社 1985年 |
| Author(s)    | 元井, 能   |
| Citation     | デザイン理論. 1985, 24, p. 124-126  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/52653">https://doi.org/10.18910/52653</a>   |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Ray Watkinson

## “William Morris as designer”

Studio Vista, London, 1967

レイ・ワトキンソン著  
羽生正気・清訳

### 「デザイナーとしてのウィリアム・モリス」

岩崎芸術社 1985年

一般に、書評といえは、書物の内容、すなわち、その本に書かれていること、に対して批判をおこなうものである。しかし、私たちは意匠学会に属し、デザインの研究をおこなっているものであるから、単に、書かれている内容の面だけでなく、デザインという見地からも、この本を批判の対象として悪いはずはなく、したがって、本書の外部的、すなわち、その体裁についても語ることにしようと思う。

この本の原書と訳書とについて、一見したところ、両書のうちで訳書の方が大きく感じられた。そこで、両書を比べてみると、本の厚味を除いては、縦・横とも同寸法であった。ただ、厚味が訳書の方が厚いだけであるのに、訳書が大きく感じられたが、それは何故かと考えてみると、原書ではブルーグレーを基調にしたカバーがかけてあるのに対し、訳書では淡いヴェージュに黄色系で、前者が寒色で縮少して見えるのに対し、後者は暖色で膨脹して見えるからであろう。また、たしかに、原書の本文は83頁であるのに対して、訳書では168頁と倍以上の量になっている。しかし、このことよりもむしろ、さきのべた色調による感じ方が、両者を軽快と重厚の違いにしていることであって、それぞれの顔をして悪いということではなからう。

一般に、欧文を日本語に翻訳した場合、日本語の方が長くなりがちであるが、本訳書の

場合は関係がない事柄である。原書に比して本訳書の頁数が増えているのは、冒頭の日本語版への特別の前書きが加えられていること。横文字に比して、日本の文字の小さいのはきわめて読みづらいので、原書が一頁42行であるのに対して、27行と行数をおとし、文字を大きくしてあること。原文にはない、訳注、関連地図、図版一覧及び凡例がつけ加えられていて大層便利になっていること。以上の事柄によってである。ついでながら、年表をのせてくださると有難かったと思う。原著書、レイ・ワトキンソンは1913年、英国マンチェスターに生れた。生地マンチェスター美術学校に学んだあと、イラストレーター、版画家、ドラフツマン、また、ジャーナリスト、批評家と幅広い分野で活躍し、ロンドン大学、ブライトン工科大学、マンチェスター大学などで芸術とデザインについての歴史と実技を教えた。現在は専ら著述を事としている。《デザイナーとしてのウィリアム・モリス》は1967年に書かれたものである。

日本語版への前書にもあるとおり、「1984年は、英国の偉大な誌人・デザイナー、ウィリアム・モリスの生誕150年祭」に当たっていて、ウィリアム・モリス協会の機関誌の編集長であるレイ・ワトキンソンは「今日のウィリアムモリス展」の企画者の一人として多忙をきわめられたことであろう。このような原著者である限り、ウィリアム・モリスに関する評伝は興味深こと論を俟たないところである。ロンドンの、というよりも世界における美術工芸のコレクションを蔵することで有名なヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の故ピーター・フラウドは、ウィリアム・モリスについてのもっとも確かな研究家として知られている。このフラウドなきあとのモリス研究者の第一人者として、レイ・ワトキンソンが存在しているのである。ということは現在、ウィリアム・モリス研究のもつとも信じうる、価値ある書といえるわけである。

本書は7つの章に分かれている。

1. 生涯と背景 (Life and background)
2. 商会 (The firm)
3. 先駆者たち (Precursors)
4. ステンドグラス (Stained glass)
5. パターンデザイン (Pattern design)
6. 印刷 (Printing)
7. A&C(The Arts and Crafts Movement)

以上のような分けかたであるが、内容はそれほど明確に章の表題についてだけふれている、といった内容ではなく、すべて各章がつながった内容となっている。例えば、はじめの「生涯と背景」は、内容的に第2の「商会」第3の「先駆者たち」、さらに終章の「A

&C運動」までのびている、とも考えられ、本書の表題としての「デザイナー」としては第4、第5、第6で主にあつかわれている。「半ダースにもものぼるクラフトに精通し」ていたモリスの「デザイナー」としての業績を以上の三つに集約した、ワトキンソンの説明はきわめて明解である。ただ、専門家にとっては、きわめて重要で、且つ最高度の参考資料が与えられているようが、一般読者、あるいは印刷あるいはタイポグラフィーにかかわりのない人にとっては、かなり難解で、精細すぎると感じるのは私だけであろうか。

ウィリアム・モリスについて、ニコラウス・ペプスナーが「モダンデザインの開拓者」として論及しているが、ペプスナーの論が建築的世界にポイントがおかれていること、彼がドイツ系であることなどで、ワトキンソンのモリス観の方がはるかに血の通った論考と感じとれるものがあるのは、本書の最上の利点であろう。

デザインとクラフトについて、日本では両者の区別を明確にしていると信じられているが、ワトキンソンのモリス観を通して、両者の明確な区分と同時に、重要な共通項の存在に心すべきことを本書は教えてくれていると思うのは私一人だけであろうか。

終りに、本書の訳書、羽生正気氏が本年6月に昇天された。心から哀悼の意を表するとともに、このつたない書評を、彼への鎮魂歌としたい。また、あとにのこされた清夫人とその御令息の御多幸を祈るものである。

(元井 能)